道路ユーザーネットワーク広場

NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK

☆三好礼子の☆ ナチュラル・ロード

バイクがいっぱいでウキウキ。

三好礼子
エッセイスト・元国際ラリースト
～http://www.fairytale.jp/～

太平洋側から日本海の千里浜を目指すバイクイベント「SSTR」から2ヶ月が経ち、仲間と出会っては思い出話に花を咲かせ、「来年はどのバイク？　どの道を通る？」と語る日々。

後を引くこのイベント、主催者とゲストも迫力です。主催者の風間深志さん（66歳）は、バイクで地球を縦軸（エベレスト6005m地点）横軸（南極・北極）に到達した稀有な冒険家。2004年に再挑戦したパリ・ダカールラリーで不遇の事故に会い、現在も左足に機能障害が残るものの、いろんな冒険を続ける豪快なカリスマです。私は彼がバイク雑誌の編集者時代からの知り合い（かれこれ40年）ですが、師弟関係というより兄妹。今回は息子で今年のパリダカを見事に完走した風間晋之介さん（32歳のMXライダー&俳優）と一緒のトークが楽しみでしたが、SSTRスタッフとしてまめまめしく働く姿に感銘。次回も親子で挑戦のはず。改めて月日が流れるのもいいなあ～と思いました。

そして、風間さんとは名コンビで、旅ライダーのカリスマと言えば、常連ゲストの賀曽利隆さん（67歳）。実は私、高校生の時に本屋さんで見つけた、彼の著書「アフリカよ」でバイクでアフリカに行く決心をし、資金を稼ぐべく、高校卒業と同時にプレスライダー（原稿輸送員）となりました。その憧れの賀曽利さんと、もう43年も仕事でのご縁が続いているのですから、人生は面白い。「生涯旅人」をモットーに、世界130カ国150万キロを走り続け、30歳代からは年代別日本一周、島巡りや温泉で日本一周（60歳代での300日3000湯ツーリングはギネス認定）。「カソリスト」なるファンは増える一方で、今回もサインを攻めでした。

他のゲストも豪華でした。愛車で駆けつけて、素敵な応援歌を披露してくれたタレントの「ぐっさん」こと山口智充さん）。日本中の林道を何度も走破し、今は250ccのトレイルバイクで「日本林道一筆書きプロジェクト」を実践中の40代主婦の松下時子さん。そして風間さんとは釣り仲間で「アウトドア漫談」の世界を確立したという落語家の林家彦いち（ひこいち）さん。来年は絶対にバイクで参加すると表明しておりましたが、トークも宴会も？底抜けに愉快なメンバーでした。バイクはいいな。冒険家は優しいね。自分の世界を疾走する爽快さが笑顔に溢れていたのは、参加者も同じだったかも。

さて、イベントも無事終了し、後ろ髪を引かれながら千里浜を後にします。すっかり故郷となり、去り難いのはみんな同じらしく、浜辺で写真を撮りつつ、いろんな人と話し込んでいます。行きは楽で帰り道がハードな人、その反対の人と色々ですが、松本在住の私は中間派。280キロ走ってスタート地点に赴き、ゴールまでが263キロ。そして帰路は高速で260キロ。全行程約800キロは、距離も疲労も割りと楽ちんなコース設定でしょう。千里浜からほぼ全員がいなくなった夕方、独りで高速に乗りました。6人での珍道中でしたが、帰りはそれぞれの自宅へ向かうので、ソロツーリング。でも帰りたくないので、普段は一気の道のりも、サービスエリアに寄ること数カ所。その度に、ゼッケンつきのSSTRステッカーを貼ったバイクが停まっているので、話し込んでしまいます。関東方面から東北方面までいましたが、誰もが家に着くまでが旅。突然、たったひとつの事故も決して起こしてはならないという気持ちが途中で強く沸き上がってきて、なぜか眠くなることはありませんでした。

今回はSSTR始まって以来の夕日が見られたそうですが、この日も快晴。富山の辺りでは水辺線に沈む瞬間が見られそうだったので、走りながら風景を追いかけました。ああ、バイクでのこの感覚、涙がでそう～。と思い切り感傷にふけりつつ、糸魚川、白馬、大町へ。入った道の駅でついスタンプ押しそうになる自分に幾度も笑いましたが、無事帰宅。濃くて愛おしい52時間の旅でした♪

（写真提供：株式会社風間深志事務所）

左が主催者の風間深志さん。右が林道一筆書きの松下時子さん。どちらもパワフル！

賀曽利さんとのツーショットは、いつもこれで決まり！　元気貰いました～。

自分の道を辿って続々と集まってきた2500人のライダーたち。誰もが絵になっていた。

灼熱の中で行われた「ぐっさん」のコンサート。愛車のトラちゃんも聴いていたよ。

集まって解散するだけなのに、この笑顔。再び集う＝ラリーだから、みんなまた来年会おうね～♪

都市計画の中の道路⑨
バロックの都市と街路（その5）

東洋大学国際地域学部・准教授
志摩憲寿

バロックの都市はヨーロッパ諸国やアメリカ、日本だけにみられたという訳ではなく、これらの国々が植民地支配したアジア・アフリカ・ラテンアメリカ地域にも建設されました。スペインによるメキシコシティ（1521年）、グアテマラシティ（1527年）、キト（エクアドル）、クスコやリマ（ペルー）を端緒として、フランスによるカサブランカ、マラケシュ、フェズ（モロッコ）といった北アフリカ諸都市の改造、イギリスはニューデリー、アメリカはマニラにそれぞれバロック都市を建設します。植民地政府は、このように、15世紀末から20世紀前半にかけて交易や支配の拠点として「植民都市」を次々と建設してゆきますが、記念碑的な建築物と直線的な放射状の街路などから成るバロック都市の手法は、交易や支配のための商業業務地区や本国の人々の住宅地区を供給する役割を担う一方で、植民地政府の権力を分かりやすい形で誇示するために使われた側面もあります。

日本もまた中国や旧満州、韓国、台湾などの植民地にバロック都市を建設しました。日本による台湾植民地支配の中心都市とされた台北では、1898年、後に関東大震災の復興計画でも有名となる内務官僚・後藤新平が民生局長に任命され、また、「日本近代上下水道の父」とも呼ばれるスコットランド人技術者ウィリアム・K・バルトンが衛生顧問技師として招聘されました。都市下水道の建設に始まり、1899年には第一回市区改正案の発表、1900年には台湾家屋建築規制の交付というように矢継ぎ早に都市の改造が始まります。1904年には、城壁がすべて撤去されて、その石材を舗石に転用してその跡地には並木のある「三線道路」が建設されます。この三線道路が現在も市内の主要街路となっている中山南路、愛国西路、中華路、忠孝西路ですから、台北中心部の骨格はこの頃に形成されたと言えましょう。台北では、さらなる都市化の進行に対応するため、1932年には当初の計画人口の4倍、計画面積は9倍という「大台北都市計画」が発表されました（図1）。この計画の力点は道路と公園の新設に置かれました。道路は3等級に分けられ、幅員の広いものは60～80メートルで、幅員100メートルの公園道路も5本が東西と南北に配置されました。なかでも総督府調査前の道路は東西の軸線と公園道路を兼ねた「仁愛路」となりました。

日本に限らず植民都市におけるバロック都市の都市計画には、本国では適用しにくかった都市計画理論や制度が直接的に導入されることが多く、いわば「実験場」としての性格も合わせ持っていましたから、バロック都市の特徴がより明確に現れているかもしれません。

参考文献：石田頼房（2004）「日本近現代都市計画の展開」自治体研究社、後藤治（監修）・主惠君・二村悟（著）（2010）「台湾都市物語」河出書房新社、都市史図集編集委員会（編）（1999）「都市史図集」彰国社

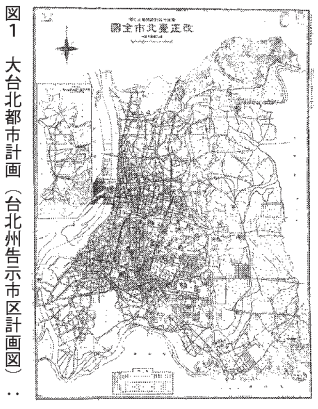


図1　大台北都市計画（台北州告示市区計画図）：現在の台北の基本的な都市構造が計画された（出典：都市史図集編集委員会（編）（1999））

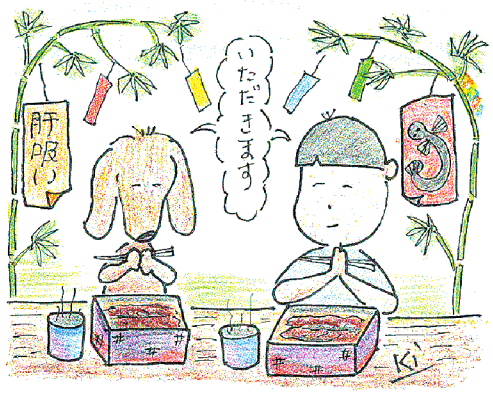
図2　台湾総督府庁舎：記念碑的な建築の建設はバロック都市の基本的手法であった

ハッと思いました

七月になると、夏休みを目前にしてそわそわし始めていたあの頃。もう半世紀以上前のことです。田舎の狭い地域で生まれ育った私には、里帰りと言った事はなく、泊りがけで出掛ける事への期待は皆無でした。

休みになったら何をしようかと子供ながらに一生懸命に考えるのです。裏の山に秘密基地を作ろう。木の上に小屋を作ろう。夏休みの友（宿題）は休みになったら一週間で終わらせよう。など計画は限りなく出てきます。学校の帰りには、基地材料にと板切れや棒を拾い集めたり、ゴミ焼き場で釘をあっさたりしながら、着々と準備をしたり・・。

思えば、先生や親から、休み中の注意として、車に気を付けて・など言われた記憶がありません。だってほとんど車が走っていませんでしたから。むしろ、川遊びや花火の火の始末などの注意が記憶に残っています。やってはいけない事、危険な事、危ない場所や時間帯など、誰に教わったのかははっきりしませんが、いつの間にか意識の中にしみついていた様に思います。



あれから五十有余年を経て、地球規模の気象変動なのか温暖化が騒がれ、省エネの観点から一年の半分はクールビズで過ごします。

このクールビズも、国を挙げて誰かが宣言して始まるのですが、それってどう言う事？　暑ければ、薄着にしたり、帽子をかぶったり、水を撒いたりすればいいじゃないですか。自分で判断すればいいことですよ。そうは言っても今の社会では、人の目もあるでしょ。との意見もあるでしょうが、普段「我が手中のスマホが命」でお過ごしの大多数の方々に、人の目など無関係でしょう、と言いたい。

人と人とのふれあいや、周りへの気配りなど、皆さんの好きな例の言葉、そう絆が本当の意味で理解できていれば、右に倣えの号令でクールビズに向かう日本は、ちょっと変だなとは思いませんか。

暑ければ暑いなりに、寒ければ寒いなりに、常識的に自分で判断して対応できる人間でいたいと思います。

さて、夏バテの前にウナギでも食って栄養補給しようかな。並か上か、はたまた特上か。自分の判断が迫られているのです。